

越生小学校

7月17日(木)、2年生が越生町産の「ホワイトコーン」という種類のとうもろこしの皮むき体験を行いました。生産者の方からとうもろこしの説明を聞いた後、一つ一つ丁寧に皮をむきました。その日の給食でおいしくいただきました。



梅園小学校

7月17日(木)の給食最終日に、2年生が学校給食に使用する「とうもろこし」(越生町産)の皮むきを行いました。1本目は、皮をむく(ひげの部分)のに時間がかかっていましたが、2本目、3本目とだんだんと速くなり、みんなで協力してむくことができました。新鮮な朝採りのとうもろこしを提供してくださった地元農家さんに感謝です。



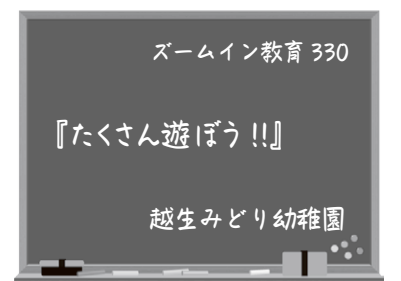
越生中学校

7月10日(木)に梅園駐在所の方を講師にお迎えして、非行防止教室を実施しました。非行防止について、生徒同士のロールプレイ等を交えて分かりやすく講義をしていただきました。生徒にとって、身近な駐在所の方からのお話は、生徒たちの心にしっかりと響いていました。



おごせっ子広場

町内の小中学校や町の行事等に参加するこどもたちを写真で紹介するコーナーです。



【縦割り保育】今年度、全園児が4つのグループに分かれて縦割り保育を行うことになりました。第一回目は、それぞれのグループで自己紹介をしてから一緒に給食を食べました。年長児がリードをしながら話を進め、給食を食べる場所をみんなで見学しました。年長児が年少、年中児を気遣い、優しく声を掛けていた姿が印象的でした。

給食を食べた後は、何をしようか話をし合い、みんなで一緒に遊びました。ホールで「だるまさんがころんだ」をしていたグループも！今後何回か行う予定です。子どもたちが縦割り活動を通して、どんな風に成長していくのか、とても楽しみです!!

【2歳児クラス・うさぎ組】みどり幼稚園では、保護者の方からの希望もあり、今年

度から行事の日以外うさぎ組が毎日になりました。

一学期は、砂場や水遊び、季節の制作も楽しみました。午前中は外で遊び、給食やお弁当を食べた後はお昼寝をします。午後は、子どもたちのペースに合わせ、ゆったりと室内で過ごします。お歌や手遊びも覚え、楽しそうに笑い声が聞こえてきます。他のクラスに遊びに行くこともあり、お友だちとの関わりも増えてきました。これからも異年齢での関わりを大切にしていきたいと思っています。

越生浪漫 No.199

「梅園村」名所の誕生

町の魅力

令和元年の住民意識調査で「あなたは、越生町のどのようなところが魅力だと思いますか」との問いに対し、「自然環境・景観が豊かである」が最も多い回答でした。特に自然と共存する梅園地区には越生梅林や黒山三滝をはじめとする名所があり、観光拠点の中核となっています。

交通手段と道路状況

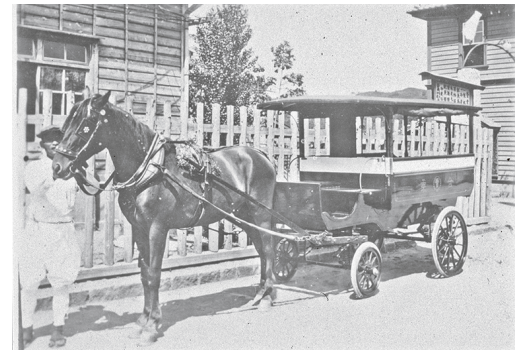
明治25年(1892)、川越町の乗合馬車「佐久間軒」が越生町に出張所を構え、4月17日に開業、川越町―越生町が開通しました。川越発越生行は午後3時、越生発川越行は午前6時で、運賃は一名につき金二十銭でした。越生町から先の梅園村へ向かうには徒歩か人力車を利用するほかありませんでした。



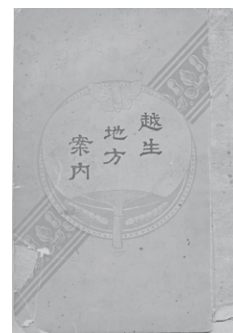
黒山に着いた渋沢栄一一行と人力車(明治45年)



「魁雪亭」(絵葉書より)建物名は書家の柳田半古(泰麓)の命名で、昭和58年まで存在していた。



越生馬車会社の乗合馬車



大正5年発行『越生地方案内』：越生町～毛呂山町にある施設や寺社などを掲載した案内書

明治32年6月、尾高惇忠と渋沢栄一は、渋沢平九郎最期の地黒山を訪ねるため、島野伊右衛門宅・現「金子家住宅」(国登録有形文化財)に投宿し、翌朝出発しました。栄一の日記では「午前七時越生ヲ発シ、腕車ヲ僦テ黒山ニ抵ル、雨後ノ道路、殊ニ山間陝隘ニシテ頗ル險惡ナリ、午前九時黒山村平九郎戦没ノ地ニ達ス」とあり、現在は舗装道になっている7.4km(車で約11分)の距離を2時間かけて向かったこととなります。

梅園村の転機

明治32年2月、東京朝日新聞社の加藤米司(眠柳)記者が梅園村を訪れ、「梅園の別

乾坤」と題して、村や梅林を紹介する記事を掲載しました。眠柳は地元民の勧めで梅園神社裏手の琴平山から梅林を眺め、翌日にも越生町の旅館から引き返して観に来るほど感動しています。『東京朝日新聞』は33年2月にも「梅園だより」と題して、村の有志が観梅客の増加を理由に梅林内に休憩所兼宿泊施設「魁雪亭」を設けた記事を掲載しています。梅園村の梅林は次第に文人墨客に知られるようになり、34年には奈良県

梅園のさと」で知られる歌人の佐佐木信綱も明治30年代に観梅に訪れています。

5〜6度低く、町のクルルスポットです。また黒山では、古くから鉱泉が知られて効能のある湯として利用されてきました。明治36年10月『都新聞』(現東京新聞)の記事には埼玉県衛生試験所に鉱泉の分析を依頼したとあります。

観光名所として

小説家の田山花袋は大正12年発行の『東京近郊一日の行楽』の中で、「新月の瀬の梅」、「黒山熊井の二鉱泉」を取り上げました。「新月の瀬は、毎年梅の季節になると、新聞によく書かれるが、しかも、交通が不便なので、人は滅多に出かけて行つて見るものはない」としながら、花袋自身は「しかし、其処は実際梅花の名所として、東京附近第一である」と称賛しています。

地元の文化人達も『梅林弘報』や『黒山案内』といった案内書を発行し、郷の名所を伝えようと活動しました。